

フランスにおける日本文学受容の一側面

火野葦平の場合¹

渋谷 豊

キーワード：火野葦平 受容 翻訳 フランス

はじめに

二〇世紀前半のフランスにおける日本文学受容の実態を検証しようとするとき、一九三九年という年は興味をそそられる年ではある。ドイツ軍によるポーランド侵攻を受けて英仏がドイツに宣戦布告したのは一九三九年九月三日だったが、国際関係がかくも緊迫したこの時期に日本の文学はフランスでどんなふうで紹介され、どんなふうを受けとめられていたのだろうか。そういうことはまだ殆ど何も分かっていないのだ。

戦前、戦中のフランスにおける日本文学受容を考察する際にぜひ目を通しておきたい本や雑誌は幾つかあるが、中でも注目に値するのは、一九三四年十月から一九四〇年四月まで刊行されていた仏語雑誌 *France-Japon* である（以下、『フランス・ジャポン』と表記）。発行元は、時流に逆らって「日仏提携」の可能性を模索していた日仏同志会で、編集部は南満州鉄道株式会社のパリの事務所に置かれていた。編集の実際にあたったのは読売新聞紙パリ特派員の松尾邦之助ら数名の在仏邦人と、トロカデロ民族誌学博物館（人類博物館の前身）の研究員を務めていた若きフランス人、アルフレッド・スムラーだった。同誌は政治、経済、軍事の動向にも決して無関心ではなかったが、どちらかと言えば文化面を重視する立場をとっていて、日本文学の紹介には毎号のようにページを割いている。とりわけ、まだフランスで殆ど知られていなかった明治期以降の日本文学の翻訳、紹介に努めた点は特筆されてよい²。

『フランス・ジャポン』の基本方針は日本文学を幅広くフランス人読者に紹介することにあつたようで、特定の作家なり流派なりを特別扱いすることはまずなかった。ただ、それで

¹ 本稿は科学研究費基盤研究（C）「両大戦間期フランスにおけるジャポニザンの活動」（研究課題／領域番号16K02530, 研究代表者：渋谷豊）の成果の一部である。なお、本稿は科学研究費基盤研究（C）「昭和10年代における文学の〈世界化〉をめぐる総合的研究」（研究課題／領域番号15K02243, 研究代表者：松本和也）と上記の科学研究費基盤研究（C）「両大戦間期フランスにおけるジャポニザンの活動」の共催による研究会「戦時下におけるメディアと対外戦略」（二〇一六年九月六日、東洋大学・白山キャンパス）において口頭で発表した内容の一部を取り上げ、新たに書き下ろしたものである。同研究会に参加された方々には多くの貴重なご意見をいただいた。記して感謝申し上げます。

² 『フランス・ジャポン』は近年、復刻版が刊行され（和田桂子監修『FRANCE-JAPON』ゆまに書房、全七巻、二〇一一年）、併せて論集も出版された（和田桂子・松崎碩子・和田博文編『満鉄と日仏文化交流誌「フランス・ジャポン」ゆまに書房、二〇一二年）。本稿はもっぱら『フランス・ジャポン』の文芸誌的側面に注目するものであるが、同誌は実はプロパガンダ誌的な側面も有している。その点については上記の論集に収められた拙論「対外宣伝誌としての『フランス・ジャポン』」を参照されたい。

も同誌のバックナンバーを読み返すと、一九三九年にはある一人の作家の名前が比較的高い頻度で現れることに気づく。「兵隊作家」として日本で脚光を浴びていた火野葦平の名である。この作家を扱った同誌の書評、評論、翻訳のタイトルを挙げておこう。

- ① Ashihei Hino, « Le Tabac et le soldat », traduit par K. T., *France-Japon*, n° 38, février 1939, p. 75-79.
- ② « La Multiplicité des prix littéraires au Japon », *France-Japon*, n° 40, avril 1939, p. 213.
- ③ « Informations littéraires et artistiques du Japon », *France-Japon*, n° 42, juin 1939, p. 357-358.
- ④ Ashihei Hino, « La Boue et les soldats », roman traduit par N. Matsudaira, *France-Japon*, n° 45, 1939, p. 470-486.

①は「煙草と兵隊」の、そして④は『土と兵隊』のフランス語訳である。②は「日本の様々な文学賞」と題する無記名の記事で、芥川賞の権威を強調しながら同賞の受賞者の一人、火野葦平を紹介している。③の「日本の文学・芸術に関する情報」は同誌にほぼ毎号のように掲載されていたコーナーで、この号では『土と兵隊』の映画化を報じている。

この四つの中で、より詳細な検討に値するのは①と④だろう。

以下では、大戦前夜および開戦直後の日仏間の文学的交渉に関して、ひとまず一つの「覚書」を書き記すという程度のもりで、火野葦平の作品の翻訳、紹介に関するデータを整理することとする。フランスのメディアの動静や読者の反応にも目を配る必要があるだろう。

『土と兵隊』——その1. フランス語訳をめぐって

『フランス・ジャポン』誌による紹介は順番が前後しているが、原著は「煙草と兵隊」よりも『土と兵隊』の方が先に刊行されている。『土と兵隊』は火野葦平の代表作でもあることなので、本稿ではまずこの作品を取り上げることにしよう。

上に示したように、『土と兵隊』の仏訳は『フランス・ジャポン』第四五号に掲載されているわけだが、実はこの第四五号がいつ刊行されたのか、正確なところは分からない。表紙の記載から一九三九年に刊行されたことは確かなのだが、なぜかこの号に限って、どこにも刊行の月日が記されていないのだ。もっとも、同じ号に載っている他の記事から、欧州で戦争が始まって間もない時期に刊行されたものだと推測できる。同号に掲載されている野上弥生子のエッセーには編集部の注記が付されていて、それによれば、そのエッセーは「戦争」のために洋行を途中で切り上げて帰国することになった野上弥生子が、ポルドーで鹿島丸の出港を待つ間に執筆したものだといっているのである³。この場合の「戦争」とはむしろ第二次大戦を指す。『フランス・ジャポン』編集部はそんな時期に敢えて同時代の日本の戦争を描いた『土と兵隊』をフランスに紹介したのである。

訳者の N. Matsudaira, 即ち松平齊光はパリ大学博士であり、『フランス・ジャポン』の中心メンバーの一人でもある。同誌に民俗学的な色合いの濃いエッセーを多数寄稿する一方で、

³ *France-Japon*, n° 45, 1939, p. 469.

谷崎潤一郎の短編小説「二人の稚児」の仏訳なども発表している⁴。

訳者は簡単に作者を紹介してから訳文を提示し、最後に訳者後書を添えている。まず作者紹介のいわゆる「導入文」を見ておこう。

Ashihei Hino est un des jeunes romanciers japonais actuels et peut-être l'écrivain le plus populaire du Japon. Complètement inconnu, il y a seulement quelques années, il menait la vie obscure d'un simple contremaître de dockers dans un port du Japon méridional.

En 1937, il obtint le prix Akutagawa – équivalent du prix Goncourt – qui tout de suite fit de lui un romancier en vue. La nouvelle de cette récompense lui parvint alors qu'il était au front, quelque part en Chine. C'est de là que le caporal Hino écrivit successivement : *Le Blé et les soldats* – *La Boue et les Soldats* – *Le Tabac et les Soldats*, série de romans-reportages qui obtinrent au Japon un immense succès.

Nous donnons ici la première partie de son roman *La Boue et les Soldats*.

(大意：火野葦平は現在の日本の若手作家の一人であり、おそらく日本で最も人気のある作家である。彼はほんの数年前まではまったく無名の存在だった。一介の湾港荷役業の現場監督として、日本南部のとある港で目立たない生活を送っていたのである。それが1937年に芥川賞——ゴンクール賞に相当する賞——を受賞し、一気に世人の注目するところとなった。受賞の知らせが彼に届いたとき、彼は中国のどこかの前線にいた。その中国の前線から、火野伍長は続けざまに『麦と兵隊』、『土と兵隊』、『煙草と兵隊』という一連のルポルタージュ小説を書き送り、それが日本で大きな成功を収めたのである。以下に訳出するのは、彼の小説『土と兵隊』の第一部である。)

簡にして要を得た紹介文と言ってよいだろう。十数ページの小品である「煙草と兵隊」が『麦と兵隊』や『土と兵隊』のような代表作と同列に論じられていることに疑問を覚える向きもあるかもしれないが、すでに『フランス・ジャポン』に「煙草と兵隊」の仏訳が掲載され、同誌の読者に馴染みのあるタイトルだったことを考えれば奇とするに足りない。

『土と兵隊』の「第一部」云々については補足説明が必要だろう。周知のように『土と兵隊』は書簡体小説であって、「前書」を除く本文全体が、日中戦争の前線で「私」がしたためた手紙という体裁をとっている。宛先は「内地」にいる弟である。(ただし実際に手紙を送ることは禁じられているので、「私」は弟宛の手紙を「背囊の中に入れて」持ち歩いている。) 松平によるフランス語の抄訳がカバーしているのは第一信、即ち戦艦の船倉でしたためられた十月二十日の手紙から、十一月六日付の手紙の途中までである。より正確に言えば、十一月六日付の手紙は同月五日の出来事を綴った前半部分と、六日の出来事を綴った後半部分に分けることができるが、フランス語に訳されたのは五日に関する記述に限られている。要するに、出征後しばらくの間、目的地も知らされないまま船上で無為の日々を送っていた兵隊たちが、ついに杭州湾北沙で敵前上陸を敢行し、泥にまみれながら中国軍と激しい銃撃戦を交わし始めるところまでが訳出されているのである。所詮は抄訳に過ぎないが、作品全

⁴ « Les deux novices. Nouvelle de Junichiro Tanizaki », traduite par N. Matsudaira, *France-Japon*, n° 47, février 1940, p. 103-110.

体の雰囲気ないし〈精神〉はここからも窺うことができるだろう。なお、上に示した個所に限っても、実はすべてが漏れなく訳出されているわけではなく、かなり省略が施されているのだが、その詳細は注に回すことにして、ここではただ、手紙をしたための理由など、いわば手紙の内容に対してメタ・レベルにある言葉が省略されているのが惜しまれるとだけ言っておく⁵。

一方、訳者後書は以下の通り。

Dans l'impossibilité où nous avons été de nous procurer le texte japonais du roman, nous avons dû nous reporter à la traduction anglaise, d'ailleurs excellente, de M. Bush. Nous avons respecté les répétitions de mots qui y abondent, bien que ce ne soit pas dans la manière française, pour donner l'image la plus fidèle possible du style de l'auteur ; nous avons aussi volontairement conservé des expressions qui paraîtront peut-être curieuses, mais qui répondent aux mouvements de la sensibilité japonaise.

(大意：日本語の原著を入手できなかったため、ブッシュ氏の英訳に拠らなければならなかったが、この英訳は見事なものである。ここには同じ語の繰り返しが頻繁に認められるが、作者の文体を可能な限り忠実に再現するため、フランス的ではないと知りながら我々はこの繰り返しを尊重した。また、もしかすると奇妙に思われるかもしれない表現、ただ

⁵ 訳出されている箇所は以下の通り。(ページ数および行数は一九三八年刊の改造社版原著に拠る。)十月二〇日の手紙について言えば、p. 11, 1.1「(弟へ十月二十日〇〇丸にて)」～p. 15, 1.3「…少しも判らないのだ。」を訳出し(その後、「兵隊がそうとうの親父ばかりであること」に言及した一節は省略)、続いてp. 15, 1.12「そうして編成が終わっても…」～p. 16, 1.2「…又も出発する様子がない。」を訳出。(その後、船の目的地を巡って兵隊たちの中で「色々な噂や風説」が広がったことを伝える一節を省略。)さらにp. 16, 1.9「もとより殉国の志を以って…」～p. 16, 1.12「…鍛錬されてゐない。」を訳出。「手紙」を書く動機について語った一節、および船艙での「船中慰安会」の一節を省略。)またp. 20, 1.10「自分はこの頃深く考え…」～p. 24, 1.2「…楽しみなのである。」を訳出。(船内の食事のシーンは省略。)p. 24, 1.8「夕日と…」～p. 25, 1.6「…酒を飲むやうになつた。」を訳出。「(理屈っぽい手紙で取りとめもなかつた。又、書かう。)」というこの日の手紙の締めくくりの文は省略。)十月二八日の手紙については、p. 27頁の冒頭「(弟へ 十月二十八日 〇〇丸にて)」を訳出。(その後、船の目的地については「相かわらず何にも判らない」云々を省略。)p. 28, 1.4「ただ、この頃はしきりに…」～p. 28, 1.7「…に向つての上陸演習だ。」を訳出。(兵隊の運動不足について触れた数行を省略。)p. 29, 1.2「しかし我々より可哀そうなのは馬…」～p. 29, 1.10「…遂に殪れた馬を見た。」を訳出。(船艙で死んでいく馬についての記述を省略。)p. 30, 1.6「私はかういふ軍馬を見ると…」～p. 36, 1.7「…鎧でも着たやうである。」を訳出。(兵隊たちの身につけている様々な守り袋や千人針について記した一節を省略。)p. 37, 1.6「ところが、ここに、これらの…」～p. 40, 1.3「…美しいと思うやうになつて来た。」を訳出。(敵前上陸演習について記した長い一節を省略。)十一月二日の手紙については、p. 45, 1.1「(弟へ 十一月二日 〇〇丸にて)」～p. 47, 1.11「…聞えるばかりである。」まで訳出。つまり、この日の手紙は省略なく訳出されていることになる。十一月四日の手紙については、p. 48, 1.1「(弟へ 十一月四日 〇〇丸にて)」～p. 51, 1.3「…手紙を書くのに余念がない」を訳出。(その後、クジラや日本の輸送船隊について記した一節を省略。)続いてp. 52, 1.11「船艙の中甲板で…」～p. 56, 1.9「…父チヤンバンザイ。」を訳出。十一月六日の手紙については、p. 57, 1.1「弟へ 十一月六日 松林鎮にて」～p. 85, 1.10。「…ようやく戦場の第一日が終つた。」を訳出。つまり、十一月六日の手紙には五日と六日の二日間についての記述がなされているが、その内、五日についての記述は省略なしに訳出されていることになる。なお、訳者が省略を施す際に中斷符を記していることもあるが、多くの場合、そのような配慮は示されていない。また、原著p. 77とp. 78の間に本来は何の記載もないが、訳者は原著のp. 78, 1.1以降を「II」としている。つまり十一月五日の戦闘についての記述を二つに分けているわけで、これは英訳には認められない仏訳独自の措置である。

し日本的な感性の動きに対応している表現についても、敢えてこれを保持した。)

つまり、この仏訳は「ブッシュ氏」による英訳の重訳なのである。ブッシュ氏とは、山形の高校で教鞭をとっていた英国人ルイス・ブッシュのことで、彼は日本人の妻の助けを借りて火野葦平の作品を次々に英語に翻訳し、在京の出版社、研究社から刊行していた⁶。さらにブッシュは自ら訳した火野葦平の四作品（『麦と兵隊』『土と兵隊』『花と兵隊』『廣東進軍抄』）を *War and Soldier*（戦争と兵隊）という総タイトルのもとにまとめ、ロンドンのパットナム社から一冊本として上梓してもいる⁷。松平はそのどちらかを手に入っていたのだろう。ルイス・ブッシュはその後、英国海軍に志願し、太平洋戦争が勃発すると香港で日本軍と対峙して日本の捕虜となるが、一九五〇年代にはそんな戦争体験を振り返り、一冊の回想記を上梓している。その日本語版に序文（「序——ありがたい外国人」）を寄せたのは火野葦平だ⁸。この回想記には後でまた触れる。

断わっておくと、ルイス・ブッシュの翻訳の底本は当然ながら戦時下に刊行された初版本——『土と兵隊』について言えば一九三八年刊の改造社版——であるが、当時は検閲が厳しく、それ故、初版本のテキストと戦後刊行された新潮社版のそれではかなりの異同がある。英訳なり仏訳なりを手にとる現在の読者はそのことを知っておく必要がある。

本稿では訳文を原文と一文ごとに突き合わせて検討することはしないが、仏訳の質について一言述べておくと、重訳である以上やむを得ないのだろうが、この訳文が日本語原文の語彙、構文、発想からかなり遠ざかったものになっていることは否めない。どうにか大意は伝えている、という程度の出来栄か。松平は上掲の訳者後書で「奇妙に思われるかもしれない表現」云々と述べているが、これは日本語特有の言い回し（「眼に入れても痛くない」等）を英訳に倣ってそのままフランス語に移し換えたことを言っているらしい。それはそれで一つの見識ではある。タイトル中の「土」を *Boue*（泥、ぬかるみ）と訳したのは、英訳の *Mud* に従ったまでのことだろう。ちなみに研究社版の英訳が刊行されたのとほぼ同じ時期に、アメリカでやはり『土と兵隊』の英訳を上梓した石本シズエ、つまり後の政治家の加藤シズエは、タイトル中の「土」を *Earth* と訳していて、これはまたひどく大らかな訳語のようだが、あながち間違いとも言えない。むしろ作品全体に新たな光を投げかけるユニークな訳語と称すべきかもしれない⁹。

なお、原著には挿絵の代わりに「船中慰安会」「暮れゆく海」「上陸」「敵の防備」などキャプションのついた写真が載っている。これは、作品の「ルポルタージュ小説」（松平）的性格を補強するものとも言える。ルイス・ブッシュの英訳本では、研究社版においてもパットナム社版においても写真は割愛されているが、『フランス・ジャポン』掲載の仏訳には複数の写真が添えられている。原著に写真が挿入されているという情報を訳者が得ていた

⁶ ルイス・ブッシュによる『土と兵隊』の英訳は Ashihei Hino, *Mud and soldiers*, translated by K. & L.W. Bush, Tokyo, Kenkyusha, 1939. (K は妻のイニシャル。)

⁷ Ashihei Hino, *War and Soldier*, translated by Lewis Bush, London, Putnam, 1940.

⁸ ルイス・ブッシュ『おかわいそうに——東京捕虜収容所の英兵記録』明石洋二訳、文芸春秋社、1956年。

⁹ Ashihei Hino, *Wheat and soldiers*, translated by Baroness Shidzué Ishimoto, New York & Toronto, Farrar & Rinehart, 1939. 紛らわしい書名だが、この訳書は『土と兵隊』 *Earth and soldiers* の全訳と『麦と兵隊』 *Wheat and soldiers* の抄訳を取録している。

のかもしれない。ただし、用いられている写真は原著とは異なるし、キャプションも付されていない。概して本文と写真との関連が原著におけるほど明瞭ではないようだ。

『土と兵隊』——その2. フランスのメディアの反応

『土と兵隊』は当時、フランスのメディアでも取り上げられた。一九四〇年三月六日、フランスの代表的な新聞の一つ『フィガロ』紙の第三面と第四面にこの作品の紹介文と抄訳が載ったのである。フランス側の反応を伝える興味深い記事であり、これまで研究者によって取り上げられることのなかった資料でもあるので、やや長くなるが、紹介文を全文引いておく。

Toutes les guerres se ressemblent

« La Boue et le soldat »

Un témoignage sur le conflit extrême oriental de l'écrivain japonais M. Ashihei Hino dans une unité combattante dont le livre vient d'avoir un immense retentissement.

Ashihei Hino – de son vrai nom : sergent Katsunori Tamai– a obtenu, en 1937, un prix littéraire équivalent à notre Prix Goncourt. Il a débarqué en Chine avec les premières troupes japonaises et il s'y bat toujours. Il a participé à l'avance sur Hang-Tchéou, en automne 1937, à l'attaque contre Hsou-Tchéou, en mai 1938, et à la prise de Canton en automne de la même année.

Avec les notes qu'il a prises au jour le jour et les lettres qu'il envoyait à ses parents et amis, il a composé un livre : *La Guerre et le Soldat*, dont plus d'un million d'exemplaires ont été vendues en quelque mois, au Japon, et que l'on compare déjà au *Feu* de Barbusse ou au roman de Remarque : *A l'Ouest rien de nouveau*.

Plus justement un critique anglais y voyait le livre de guerre du Soldat Inconnu. On sera frappé, en effet, du caractère d'universalité que présente le récit qu'on va lire. Non pas que Ashihei Hino soit un écrivain abstrait. Au contraire, il localise rigoureusement son cadre, il ne fait grâce d'aucun mouvement de terrain, il peint avec une abondance de détails dont la minutie rappelle le Stendhal de la bataille de Waterloo. Mais cette description d'un débarquement sur les marécages des côtes de Chine pourrait aussi bien être celle d'un combat dans les boues des Flandres ou de la Somme. Devant la terrible expérience de la guerre, ces « civils-soldats » japonais réagissent comme réagissaient les hommes de 1914, comme devaient déjà réagir, sans doute les recrues de Valmy : les premiers soldats d'une armée populaire.

Le fragment ci-dessous, que nous avons traduit d'après la version anglaise, est extrait de la première partie du livre : « la boue et le soldat ». Après de longs jours d'une attente monotone, à bord des transports, l'ordre arrive enfin de débarquer. L'auteur, qui est caporal, commande à une escouade de treize hommes. Le point de débarquement choisi, Sunglinchen, se trouve au nord de la baie de Hang-Tchéou. – Armand Pierhal

(大意：すべての戦争は互いに似ている。／『土と兵隊』／一部隊に属し、その著作が最

近大きな反響を呼んだ日本人作家、火野葦平氏による、極東の紛争に関する証言。／火野葦平——本当の名前は、玉井勝則伍長——は一九三七年、我々のゴンクール賞に相当する文学賞を受賞した作家である。彼は中国に上陸した日本の最初の軍に属し、今もそこで戦っている。一九三七年秋に杭州侵攻に、また一九三八年五月には蘇州攻撃に、さらに同年秋には広東攻略に参加しており、日々とりためたノート、それに親族や友人に送った手紙をもとにして、彼は一冊の本を書いた。『戦争と兵隊』がそれである。この本は日本で数か月間に百万部以上が売れた。すでにしてバルビュスの『砲火』やレマルクの『西部戦線異状なし』に準える者もいる。だが、あるイギリスの批評家はこの本を「無名戦士」の戦争の書と評して、これはよりの確な見方だ。実際、以下に訳出する物語を読めば、人はその普遍的な性格に打たれるに違いない。断わっておくが、だからと言って火野葦平の作風が抽象的だというのではない。それどころか、彼は作品の空間的枠組みを厳密に限定し、土地のどんな些細な起伏も見逃さない。ワートルローの戦いを描くスタンダールさながらの綿密さでもって、細かなディテールをふんだんに盛り込むのである。だが、それでも中国沿岸地域の湿地帯へ兵隊たちが上陸するあのシーンの描写は、フランドルやソンムの泥の中の戦闘の描写でもあり得るだろう。戦争の恐ろしい体験に直面して、この日本の「民兵たち」はちょうど一九一四年の男たちと同じように反応する。おそらくはすでにヴァルミーの新兵たち、即ち民間人で編成された軍隊の最初の兵隊たちもやはり同じように反応したのだろう。以下の断章はこの本の第一部「土と兵隊」の抜粋で、我々が英訳から重訳したものである。船上で単調な待機状態の日々を延々と過ごした後、ついに上陸命令が下る。作者は伍長で、十三人の兵士からなる分隊の指揮をとる。上陸地点として選ばれた松林鎮は杭州湾の北側に位置する。——アルマン・ピエラル)

枢軸国側の作家の描いた戦争が、大戦勃発後間もない時期にフランスのメディアにどう受けとめられたか。これはその間に対する一つの答である。『フィガロ』の評者は『土と兵隊』に描かれている戦争がいつの時代のどこの戦争かということには拘らず、むしろこの作品の「普遍的な性格」を強調する。そしてその上で、ここに自分たちの姿を——あるいはまた、塹壕の「泥」にまみれた第一次大戦中の自分たちの姿を——見ようとするのである。当時、独仏の戦争は「奇妙な」と呼ばれる状態に留まっていたわけで、それ故の余裕ないし不用意な安心感がこの記事の背後にはあるのかもしれないが、ともあれ、『フランス・ジャポン』編集部にとってこうした論調は〈我が意を得たり〉といったところだっただろう。付言すれば、この紹介文が載っているのと同じ紙面には「一九一四年の戦士たちとその画家たち」と題する記事も載っている。第一次大戦の前線を描いたりユック＝アルベール・モロー、フォラン、スゴンザックといった画家の戦争画を写真入りで紹介しながら、今回の戦争もまた優れた画家たちによって描かれなければならないと主張する記事なのだが、『フィガロ』紙の読者にはこの記事と『土と兵隊』の紹介がセットになっているように思えたのではないだろうか。つまり、『土と兵隊』の紹介文の方は画家ではなく作家たちに第二次大戦を題材にした作品を書くよう促すもので、『土と兵隊』の抄訳はそのための一つのモデルとして提示されたものと解されたのではないか、という意味だ。

ところで、『フィガロ』紙はかねてより日仏同志会の活動やフランス在留邦人による対外

文化工作にそれなりの関心を払っていた。一九三四年三月十二日には「日仏の接近のために」という見出しのもとで、『フランス・ジャポン』の発行元である日仏同志会の設立を報じている¹⁰、一九三九年五月二三日には、日本の国際文化振興会がパリの国際舞踊資料館と共同で開催し、『フランス・ジャポン』編集部も関与した日本舞踏博覧会（一九三九年五月二六日～六月二五日、於国際舞踊資料館）に関する記事を載せている¹¹。さらにその翌日には「映画人、フジタ」なる見出しのもとで、藤田嗣治が日本文化を海外に紹介するために映画を製作したものの、日本国内で評判が悪かった等と伝えている¹²。こうしたことを踏まえると、『フィガロ』紙の編集部は『フランス・ジャポン』にも目を配っていたのではないかと、同誌に松平の抄訳を発見して『土と兵隊』に興味を持ったのではないかと、なども思えてくるが、どうだろうか。もしそうだったとしたら、『フィガロ』紙の記事は『フランス・ジャポン』にフランスのメディアが示した反応の一例ともなる。

この紹介文の後に訳出されているのは、十一月六日の手紙の一部、つまり『フランス・ジャポン』誌上で訳出された箇所、そのまた一部である。詳細については注に回すが¹³、戦場から逃げそびれた中国人の老女と子供に「私」が同情するシーンでもってこの抄訳が閉じられていることは指摘しておこう。「無名兵士」の人間性をクローズアップする切り取り方である。なお、この翻訳の底本がパットナム社版の英訳であったことは、評者が『土と兵隊』を『戦争と兵隊』の第一部と見做していることから明らかだ。

紹介と抄訳の双方を担当したアルマン・ピエラルについて一言しておく、この人物はジャーナリストであると同時に目利きの翻訳者でもあった。（ただし日本語は解さなかったらしい。）彼の経歴で特に注目されるのは、戦後、ロベール・ラフォン社の「パヴィヨン叢書」の監修を務めたことだろう。「パヴィヨン叢書」は外国文学を主な対象とした叢書で、グレアム・グリーン『情事の終り』、ヘンリー・ジェイムズ『大使たち』、ディーノ・ブッツァーティ『タートル人の砂漠』等の問題作を数多く収めている。一九五三年にフランスで刊行されて評判を呼んだ芹沢光治良『巴里に死す』の仏訳も同叢書中の一冊である¹⁴。

¹⁰ «Pour un rapprochement franco-japonais», *Le Figaro*, lundi 12 mars 1934.

¹¹ «Danse japonaise et esprit samourai», *Le Figaro*, mardi 23 mai 1939.

¹² «Foujita cinéaste», *Le Figaro*, mercredi 24 mai 1939.

¹³ 訳出された箇所は以下の通り。（以下、ページ数はやはり原著の初版に拠る。）まず、髭剃りのエピソード、そして上陸のために戦艦から舟艇に乗り移るシーンが訳出される（p. 57, 1.8「小隊長が来て、怒ったような表情をし…」から p. 59, 1.6「…思わず黒く聳え立っている母船を私は振り仰いだ。」まで。）ただし逐語的な訳ではなく、兵隊たちが出撃直前に急に便意を催すシーンなどはぼかされている。次いで、舟艇で岸に向かうシーン、さらに泥にまみれながら上陸し、敵軍と銃撃戦を交えるシーンが訳出される。また、サイダーを皆で回し飲みするシーンも。（p. 60, 1.1「…潮流の速さに驚いた」から p. 67, 1.2「…みんな一口宛飲んだ。」まで。）この後、二行ほど省略があって、一人の兵隊が戦場で鶏を捕まえる場面が訳出される。（p. 67, 1.4「清水部隊長も腰を下ろして…」から p. 67, 1.10「今夜のおかずができたぞ、と笑った。」まで。）続いて数行の省略の後、激しい銃撃戦の様子を訳出。（p. 68, 1.3「上陸直後、どんどん我々より…」から p. 68, 1.12「…雨が降り出した。」まで。）さらに数行の省略があって銃撃戦のシーンの訳が続き、逃げ遅れた中国人の老婆と子供を前に「私」が「その痛ましきを見るに耐えなかつた」と告白するくだりでもって締めくくられる。（p. 69, 1.3「彼方でも此方でも薬家が…」から p. 71, 1.2「…を見るに耐えなかつた。」まで。）

¹⁴ Kojiro Serisawa, *J'irai mourir à Paris*, roman adopté du japonais par Armand Pierhal, Robert Laffont, coll. Pavillon, 1953. この本の裏表紙にパヴィヨン叢書の既刊書のリストが載っている。

「煙草と兵隊」——その1. フランス語訳をめぐって

続いて「煙草と兵隊」に関するデータをまとめておこう。上述のとおり、『フランス・ジャポン』誌上で紹介されたのは『土と兵隊』よりも「煙草と兵隊」が先だった。管見の限りで、これがフランスにおける最初の火野葦平作品の紹介である。

特筆すべきなのは翻訳者の驚異的な反応の速さだろう。原作は『文芸春秋』一九三九年一月号に掲載されたが（その後、単行本『廣東進軍抄』に付録として収録される）、その仏訳が早くも『フランス・ジャポン』一九三九年二月号に載ったのである。ちなみに「煙草と兵隊」は英語に翻訳されたのも早く、日本外事協会刊行の英字雑誌 *Contemporary Japan* の一九三九年三月号に英訳が掲載されている¹⁵。当時、日本文学の海外紹介に携わる者にとって、やはり火野葦平は注目の的だったのだ。『フランス・ジャポン』誌上では訳文を提示する前に作者および作品を紹介する導入文が記されている。

L'auteur de ce texte, Ashihei Hino, est un écrivain très connu au Japon. Il avait obtenu en 1937 le prix Akutagawa qui est l'une des plus hautes récompenses littéraires et les plus estimés. Les notes que nous publions ci-dessous, sur la psychologie des soldats au front vis-à-vis du tabac, écrites avec simplicité, d'un point de vue tout à fait individuel, ne manqueront certainement pas d'intéresser le lecteur européen. Elles ne sont ni occidentales, ni orientales, elles sont simplement humaines.

（大意：この文章の作者である火野葦平は日本で非常によく知られている作家であり、一九三七年には文学上の最高の栄誉の一つである芥川賞を受賞している。以下に読まれるノートは、煙草に関する前線の兵隊たちの心理分析であり、簡潔な文体でもって完全に個人的な視点から記されたもので、必ずやヨーロッパの読者の関心を捉えることだろう。このノートは西洋的でもなければ東洋的でもない。ただただ人間的なのである。）

「以下に読まれるノート」とはむしろ「煙草と兵隊」のこと。随筆とも小説ともつかないこの掌編を、記者はとりあえず「ノート notes」と呼んでみたのだろう。この notes という言葉はごく一般的な言葉だが、『フランス・ジャポン』などを愛読するような熱狂的な日本マニアには notes de l'oreiller を連想させたかもしれない。「枕のノート」、即ち『枕草子』である。当時、すでに松尾邦之助による『枕草子』の仏訳が存在した¹⁶。

だが、この導入文で注目されるのはそれよりむしろ「西洋的でもなければ東洋的でもない」の一文だろう。できる限り日本的なもの、少なくとも東洋的なものをフランス人読者に紹介する——それが『フランス・ジャポン』の基本スタイルだった。（日本を「東洋の博物館」とする岡倉天心的な発想はこの雑誌のベースにもある。）それだけにこの一文は目を引くのである。これは火野葦平の作品の「普遍的な性格」を強調する『フィガロ』紙の論調を先取りするものだろう。あるいはむしろ、その論調を「誘発」したと言わなければならない。「完全に個人的」云々は、何らのイデオロギーにも縛られていない、という程度の意味。『フラン

¹⁵ « Cigarettes and soldiers », *Contemporary Japan : a review of Japanese Affairs*, n° 8, Mar. 1939, p. 229-239.

¹⁶ Séishonagon, *Les Notes de l'oreiller*, traduites par Kuni Matsuo et Steinilber-Oberlin, Librairie Stock, 1928.

ス・ジャポン』編集部はこの雑誌が世に数多あるプロパガンダ誌と同一視されることを嫌い、特定のイデオロギー（とりわけ日本の軍国主義を正当化する思想）の宣伝媒体と見做されることに強い警戒心を抱いていた。

この導入文に続いて「煙草と兵隊」の訳文が載っているわけだが、その訳文は抄訳ではなく、一応、全訳である。「一応」と断るのは、細かく見ていくと訳し落としがないではないからで、もしかすると訳者の心積もりとしては〈大意の紹介〉ないし〈或る種の抄訳〉を試みたという程のことだったのかもしれない。ところで、その訳者であるが、訳文には K. T. というイニシャルが添えられている。これが誰のことかは分からないが、とにかく訳者のイニシャルであるのは間違いない。ただ、その一方で、『フランス・ジャポン』の創刊以来のメンバーだったアルフレッド・スムラーは、後年、回想記『アウシュヴィッツ186416号日本に死す』の中でこう述べている。

フランスにこれ[引用者注：「煙草と兵隊」]を紹介したのは、ほかならぬ私だった。戦前にこれを読んで、『フランス＝ジャポン』誌に抄訳を紹介していたのだ¹⁷。

これが記憶違いでないとするれば、『フランス・ジャポン』に載った仏訳は K. T. なる人物とスムラーとの共訳であったと考えるのが妥当だろう。当時、日本語がまだ堪能ではないスムラーは、パリ在住の日本人留学生たちの助けを借りながら日本の文献に目を通していたというから、もし K. T. が日本人であったとすれば、「煙草と兵隊」の訳出も彼らの共同作業であった可能性は十分にある。この点は後述する。

「煙草と兵隊」——その2 フランスの読者の反応

それにしても、火野葦平の作品を読んでフランス人読者はどんな感想を抱いたのだろうか。彼の作品、例えば「煙草と兵隊」が、フランス人読者のその後の人生にとって何らかの意味を持つことなどあったのだろうか。なかなか手をつけにくい間ではあるが（たとえ或る作品が熱心な読者に恵まれたとしても、その読者が常に感想を書き残してくれているとは限らないのだから）、以下ではやや特殊なケースを取り上げて、この間に対する答の一端を示したい。特殊な立場にある読者、即ち訳者その人に注目し、訳者の人生にとって「煙草と兵隊」がどんな意味を持ったのかを見てみよう、ということである。ついでに、訳者の一人と目されるスムラーの経歴を簡単に浚っておこう。これまで殆ど研究者の関心を引くことのない人物だが、戦前・戦中の日仏文化交流のキーパーソンの一人である。

アルフレッド・スムラーは一九一一年二月十四日にパリの「ブルジョワ家庭」に生まれ

¹⁷ アルフレッド・スムラー『アウシュヴィッツ186416号日本に死す』竹本忠雄・吉田好克訳、産経新聞社、1995年、p. 213。竹本忠雄の序文から判断すると、この回想記は日本語に翻訳されることを前提にフランス語で執筆されたものらしい。管見の限りでフランス語版は存在しない。なお、著者の名の原綴りは Smoulard であるから、「スムラール」と表記するのがより一般的だろうが、戦後、日本に移住した著者が日本風の名を好んだという事情があるため（「須村」に掛ける）、本稿でも「スムラー」と表記する。

た¹⁸。いわゆる〈塹壕の泥にまみれなかった世代〉、即ち、まだ若すぎるために第一次大戦時に前線に出ることのなかった世代の一人である。一九二九年十月にパリ大学に入学した彼は、そこで一人の朝鮮出身の学生と親しくなる。張良弘という名のその学生は、当時のこととて日本国籍のパスポートを持っていて、パリの日本人社会とも繋がりがあった。ある日、スムラーは張良弘に連れられて食事会に出かける。当時、パリに支部を置いていた大本教の幹部の家で催された食事会だったそうだが、そこで彼は松尾邦之助と知り合い、折しも雑誌創刊の準備中だった松尾に「どうだ、君、全面協力してくれないか」と言われたのだという。彼はこの申し出を「大喜び」で受ける。こうして『フランス・ジャポン』が誕生したのだ。ちなみに雑誌の名はスムラーの発案によるものだという。

スムラーが「大喜び」で引き受けたのは、すでにそのとき東洋に憧れを抱き、クーシューらの仏訳を通して俳句に親しむなどしていたからだ。ただし、彼が日本について本格的に勉強し始めるのは、やはり雑誌作りに参加するようになってからである。スムラーは『フランス・ジャポン』に多くの論文、書評、翻訳を寄稿していて、この雑誌に対する彼の貢献度は極めて高いが、見方を変えれば、『フランス・ジャポン』がこのジャポニザンの卵を育んだのだとも言える¹⁹。実際、『フランス・ジャポン』という発表の場を与えられたことが彼の学習意欲を煽ったわけだし、また、この雑誌に関わったからこそ「生ける日本、すなわちパリの日本人社会」に「深入りする経験」を持ち得たのでもある。彼がパリで知り合った日本人の中には島崎藤村、高浜虚子、有島生馬、藤田嗣治、長谷川潔、岡本太郎といった作家や画家がいて、若いスムラーには刺激となることも多かっただろう。さらに、上述のように彼は日本人留学生たちに助けられて日本語の文献を読んでもいたというのが、これはジャポニザンの卵にとって格好のエクササイズだったに違いない。日本語・日本文学のアカデミックな教育研究がまだ軌道に乗っていなかった当時のフランスで、『フランス・ジャポン』はいわばジャポニザン養成のための学校のような役割も果たしていたのである。ちなみに彼の周囲の日本人留学生の中には、後にモリエール研究者として名を成す鈴木力衛や、山田吉彦、即ち作家のきだみのるもいた。きだみのるとは一緒に「悪所通いもすれば良所通いも」した仲だという。おそらく「煙草と兵隊」の仏訳もそんな交友関係の中から生まれたのだろう。

第二次大戦が始まってもスムラーの日本に対する興味が薄れることはなかったが、その一方で、彼はフランスがドイツに占領されると対独レジスタンスに身を投じる。そして一九四四年二月、ゲシュタポに逮捕され、アウシュヴィッツ強制収容所に送られる。(回想記のタ

¹⁸ スムラーの経歴については前掲の回想録に拠るところが大きい。巻末の「アルフレッド・スムラー氏関連年表」も参照した。

¹⁹ 『フランス・ジャポン』に掲載されたスムラーの論文、翻訳の一部を参考までに挙げておく。彼が翻訳したのは、多くの場合、日本人が英語で執筆した著作である。Alfred Smoulard, « Introduction à la littérature japonaise », *France-Japon*, novembre 1935, n° 2, p. 14-15. [「日本文学入門」] / Yone Noguchi, « La Fleur du lotus », traduit par A. S., *France-Japon*, mars-avril 1936, n° 16, p. 43-44. [ヨネ野口の随筆 (芥川龍之介の童話「蜘蛛の糸」と同じ説話を扱ったもの)の仏訳] / Kyoshi Takahama, « Le Haikou (Haikai) japonais », *France-Japon*, mai-juin 1937, n° 20, p. 95-96. [洋行中の高浜虚子の講演用英語原稿をスムラーが仏訳したか?] / Daisetz Teitaro Suzuki, « Le Bouddhisme japonais », traduit par A. S., *France-Japon*, juillet 1938, n° 31, p. 313-315, *France-Japon*, août 1938, n° 32, p. 358-363, *France-Japon*, octobre 1938, n° 34, p. 448-449, *France-Japon*, novembre 1938, n° 35, p. 505-507, *France-Japon*, décembre 1938, n° 36, p. 560-561. [鈴木大拙の著作の翻訳]

イトルは、アウシュヴィッツで収容される際に腕に186416と刺青を入れられたことに由る。)その後、ブッヘンヴァルト強制収容所に移送されるが、米軍進撃の機に脱走し、一九四五年四月にフランスに帰還する。以上が大戦中のスムラーの遍歴の概略だが、彼の回想記にはブッヘンヴァルト解放直前の数日を振り返った短いエッセーも収録されているので見ておきたい。「煙草と死——火野葦平に倣いて」と題するエッセーである²⁰。

「煙草と死——火野葦平に倣いて」は、「たった一本の粗悪な煙草を吸いたいという欲求」に打ち克てなかったばかりに「ブッヘンヴァルト解放の前日か前々日かに命を落とし」た一人の収容者の話である。その収容者はスムラーの友人で、名をドラロッシュ=ヴェルネといった。米軍が進撃してくるのを知ったドイツ軍は、ブッヘンヴァルト撤退を決断する。とはいえドイツ軍が収容者たちを解放するはずもなく、また別の地に強制的に連行するのである。ブロックごと、作業班ごとに順次出発させたのだという。一方、収容者たちは解放者たる米軍が到着するまでブッヘンヴァルトに留まりたいと願う。「なんとか解放されたい、奇跡でも起こってくれないかと、誰しも最終出発組の中に残ろうと必死だった」のである。ところで、ドラロッシュ=ヴェルネの属する「第31号ブロック」は、幸い、まだしばらくは余所に連れて行かれずに済みそうだった。であれば、ドラロッシュ=ヴェルネはおとなしく自分のブロックに留まっていればよかったのだ。だが彼にはそれが出来なかった。この先はスムラーの文章を引こう。

そして、それから二、三日目のことだった。ドラロッシュ=ヴェルネが、列を離れて、ついふらふらと別のブロックのほうに行ってしまったのは。誰かが、そこで紙巻き煙草を持っているのを思い出したからだ。ほんの二、三分間で、素早く戻るつもりだった。だが、その瞬間に運命は左右されたのだった。ちょうどそのとき、そのブロックは、SSと牢名主にせきたてられて動き出し、大騒ぎとなって、彼はその渦に呑みこまれてしまったのだ。おれは第31号に帰るんだと怒鳴っても、誰もそんな声を聞かばこそ——。

一カ月半たって、いままさに休戦協定がフランスで調印されようという五月のある日、なおもバヴァリアに向かって押しやられていく一団の虜囚のなかに、ドラロッシュ=ヴェルネの姿はあった。疲労困憊し、力つきて、路上にばったり倒れた。護衛がわらわらと駆け寄って撲殺した。それまであらゆる苦難に耐えてきたのちの、これが最後だった。

私はその死を知ったのは、フランス帰還後、何週間かたったときだった。そのとき、脳裏によみがえってくる——一字一句まざまざと——ある本の一節があった。火野葦平の『煙草と兵隊』である。フランスにこれを紹介したのは、ほかならぬ私だった。戦前にこれを読んで、『フランス=ジャポン』誌に抄訳を紹介していたのだ。不吉にも、かくのごとく、一服の煙草が一人の人間の運命を左右することになろうとは……。

火野葦平の「煙草と兵隊」には煙草にまつわる逸話があれこれ出てくるが、その一つは戦場で煙草の欠乏に苦しむ一人の中国兵の話である。ある晩、その中国兵は遠くに「一点の赤い火」を発見する。どうやら吸いさしの煙草が落ちていられるらしい。「小躍り」して煙草を拾い

²⁰「煙草と死——火野葦平に倣いて」は、『アウシュヴィッツ186416号日本に死す』前掲書、p. 209-213に収録されている。

に行った彼は、日本軍の陣地に近づきすぎてしまう。歩哨に誰何されて気が動転し、「思わず火の点いた儘の煙草を口に銜えて」逃げ出すが、その火が目印となって歩哨に撃ち殺されてしまう……。ドラロッシュ＝ヴェルネの最期を伝え聞いたスムラーの脳裏に「一字一句まざまざと」よみがえったのは、この無残な逸話だったに相違ない。〈塹壕の泥にまみれなかった世代〉のスムラーは、第二次大戦前夜に初めて「煙草と兵隊」を読んだとき、まだ戦争を身をもって知ってはいなかった。だから、この作品を面白いとは思っても、その面白さは身につまされるというのとは違っただろう。だが、その後、「煙草と兵隊」の一節に彼自身の（あるいは彼と同じ境遇にあった友人の）人生が重なり、「人間の運命」について考えさせられるところがあって、「煙草と兵隊」はますます彼にとって忘れがたい作品となったのだ。実際、彼が「煙草と死——火野葦平に倣いて」を執筆したのは一九八〇年代後半のことだから、火野葦平の文章はずいぶん長い間彼の記憶に留まっていたことになる。日中戦争とブッヘンヴァルトのイメージの二重焼付けは奇妙と言えは奇妙だが、文学作品が人の心の中に生き続けるときには往々にしてそんな奇妙なことが起きているのかもしれない。

結びに代えて——ルイス・ブッシュの場合

この論文、というよりむしろ「覚書」の最後に、火野葦平の英訳者ルイス・ブッシュの回想記に触れておきたい。この人もまたスムラーのように、かつて自分が訳した火野葦平の作品を戦争中に思い出すことがあったという。

ブッシュが香港で日本軍の捕虜になったことは先に述べたが、彼はその香港で抑留中に、日本の憲兵が中国人を虐待するのを目撃したのだという。そのとき彼は『麦と兵隊』の或るフレーズを思い出す。「私は眼を反した。私は悪魔になってはいなかった。私はそれを知り、深く安堵した」というフレーズを。このフレーズは、日本兵が反抗的な中国人を引っ立て、処刑するシーンの最後の一行だ。『麦と兵隊』の「私」は中国人が処刑されるのを直視できない。そのことを自覚した「私」は、ああ、自分はまだ人間性を失っていないのだと思って「安堵」する。（ブッシュの翻訳の底本である初版本では、検閲のために処刑の記述そのものは削除されているが、それでも作者の言わんとすることは察し得る。）一方、ルイス・ブッシュは中国人虐待を目の当たりにしてこの一行を思い出し、日本兵の中には今もそんな気持ちでいる者がいるに違いないと考える。そう考えて、日本人に寄せる信頼感を辛うじて保持する——そんな思い出を綴った一節が彼の回想記の中にある²¹。

その一節もまた、スムラーの文章同様、「火野葦平に倣いて」と題されてもよかっただろう。どちらも、第二次大戦の前夜から開戦直後の時期に日本文学の翻訳、紹介に尽力した人物ならではの後日譚だ。だが、本当を言えば、この二人の翻訳を通して火野葦平の作品に触れ、そのまま何も書き残さずに消えて行った無名の読者の中にも、似たような経験をした人がいたのかもしれない。その人たちの人生をあれこれ想像しながら火野葦平の作品を読み返すのも、おそらく〈比較文学的な本の読み方〉の一つというものだろう。

（2016年10月31日受理，12月13日掲載承認）

²¹ ルイス・ブッシュ『おかわいそうに——東京捕虜収容所の英兵記録』前掲書，p. 55-56。